研究発表

上代日本文学の時間論的研究・序説

An introductory report on ancient Japanese literature studied in terms of the "time" concept

粂川光樹※

Abstract

In the late 1960s some noteworthy works appeared in connection with the problem of "time" within ancient Japanese literature. Among the subjects of those works were: Concept of circulated time and lineal time; Development of the awareness of nothingness; Distinction between sacred and secular; Meaning of the neutral zone between night and day; Mode of reminiscence; and so forth.

This brief report consists of three parts. In Part One, I examine the background by which those new aspects emerged, and introduce some achievements by Nobutsuna Saigo, Katsumi Masuda, Masao Maruyama, Jinkei Hirano and Yasushi Nagafuji.

In Part Two, I turn my attention to the "time" in *Kojiki* and *Nihonshoki*, and see how they treated the "once-only" happenings in the story to trace the origin of the lyricism

※ Kumekawa Mitsuki 〔現職〕 フェリス女学院大学教授

flavoured by the sense of "time" of such *Manyōshū* poets as Hitomaro, Tabito or Yakamochi.

In Part Three, I study why the place known as Yoshino had been connected to the concept of eternity and became a sort of sanctuary in the ancient literary works. Religion, weather, products, power of tribes, political situations etc. must be taken into account besides the influence of Chinese literature.

1960年代の後半に入って、日本文学を時間的に考えようとする傾向が次第に目立つようになった。もちろん、それ以前にも、無常感・季節感・懐古的抒情などの方面から日本文学を論じる立場はあり、それがおのずから「時間」の問題に触れることはあったが、それらはいずれも、主として日本文学の情趣性の解明を目的とするものであったように思われる。

したがって、時間の認識と文学との関係が、文学の「発想」という問題領域で論じられるようになったこと、言いかえれば文学の時間が精神史的に把握されるようになったことは、やはり一つの新しい傾向として認められるであろう。

私がいま用いた「発想」ということばについては説明を要する。思想なり文化なりを、その表現された結果においてではなく、いわば根において、芽生えにおいて、またその育てかたの理念や技術において捉えようとするとき、私たちは「発想」を問題にしているのだ、と考えておきたい。人間の精神活動は、そこではむしろ、精神と境をなして隣接するものとの関係において観察され記述される。おそらく時間論的研究は、このような意義を負って登場してきたのであった。

このような動きの背後には、一般に「時間」が今世紀の最も大きな文学的課題の一つであるという世界共通の事情があるが、より固有の契機として、

1．日本文学研究の歴史社会学的方法が、文学を美的鑑賞の対象としてでなく、精神史の対象として設定する傾向を定着させた。

2．哲学、神話学、民族学、人類学等の、海外における先駆的業績が、さかんに翻訳、紹介された。

3．文献学的研究が一応の段階に到達して、いわば実証的観念論とでも言うべきものの発展を可能にした。

などを挙げることができると思う。

上代文学に関して、はじめてこの種の問題を提示したのは、管見によれば森本治吉氏の『人麿の世界』(1943年) であるが、より具体的な提言は、西郷信綱氏の『古事記の世界』(1967年) に見られる。氏はそこで大陸からの天文暦の渡来に触れ、季節を単位とし円環を描いて年ごとに繰返される自然暦の時間と、かかる円環が破れ継起的・事件的に流動するものとして自覚される天文暦の時間とを対比し、前者から後者への推移が、国家組織の形成過程における諸経験に媒介されたはずであることを論じた。

ついで益田勝実氏の『火山列島の思想』(1968年) における発言がある。氏は、古代人にとって夜と朝とが全く異質の時間であり、その間には夜明けという深い断絶があったことを言い、そこに「永遠の凝固という特色ある想像」が生みだされたと述べている。

平野仁啓氏が、古代日本人の時間意識の問題をテーマとして旺盛な執筆活動を展開するのはこの翌年ごろからである。それらは、のち単行本『続古代日本人の精神構造』(1976年) にまとめて収録されることになるが、氏の時間論は、古代日本人の晴と褻、あるいは夜と昼という二元的認識を、E・リーチの聖化および脱聖化の図式を援用して説明し、そこにミンコフスキーの「活動性」と「期待」の概念を導入したうえで、さらに「設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れている」という、独自の解釈として展開

されたものである。

文献学的資料処理をふまえた具体的な研究の例としては、曽倉岑氏の「『この川の絶ゆることなく』考」を挙げるべきであろう。氏は人麻呂の吉野讃歌に見られるこの詞句を「永遠・永久・永続といった観念を和歌の表現に強力に導入し、これを慣用句化させた」ものとして位置づける。しかもこの讃歌には、同じく永遠の観念や表現を含む書紀歌謡の二首（紀78・102)と共通して、「建物」「天皇への奉仕・服従」「命(いのち)」「帰化人」という四つの要素が認められるとして、大陸文化との関連を示唆したのであった。

丸山真男氏は、日本人の歴史意識の「古層」に横たわる基底範疇として、A「なる・なりゆく」、B「つぎ・つぎつぎ」、C「いきほひ」の３つを挙げる（『歴史意識の「古層」』1972年)。有機物のおのずからなる発芽・生長・増殖のイメージが同時に歴史意識をも規定していることに、氏は特別の注意を向けている。

1975年には、田中元氏の『古代日本人の時間意識』が出版された。この問題を正面から論じた、研究史上はじめての単行本である。

ついで永藤靖氏の精力的な執筆活動が始まる。1976、77年発表の「時間の様相」は、平安朝の作品までを視野におさめた広範な論述で、古代人の他界観念や季節感、祭の構造などをとりあげつつ、一種の時間論的文学史として展開したものであった。

以上、60年代から現在に至る、この領域での研究史を概観した。今後の研究は当然さらに精密化し、また体系化されていくであろう。私としては、たとえば以下のような方向がそこに考えられると思っている。

1．比較文化の面から――老荘思想・仏教思想等における時間意識が、日本文学に及ぼした影響。

2．歴史意識の面から――祖霊観の形成、氏族系譜の整備などと、時間意識の展開との関係。

3．語彙・文法・修辞などの面から――「トキ」「トコシヘ」「ムカシ」などの

語義。時間にかかわる動詞「ヲツ」「経」、副詞「スデニ」、助動詞「ヌ」「ケリ」などの機能。過去・現在・未来を対比するような修辞の出現。

4．神話構造の面から――アマテラス・ツクヨミ・トキハカシなどの神格と職能。

次に、研究史を離れ、実際に記紀万葉の時間意識としてどのようなものが観察されるかを、2、3の例によって略述しよう。

古事記には、その神話や伝説の内容に属する時間と、最終的な述作者のいわば「語り」の意識に属する時間とがある。たとえば本文中の「イマ」という語をとりあげてみると、全74例中の50例は表記に疑問のある2例を除いてすべて会話の中にあらわれるところの「第1人称」的なイマである。第1人称的というのは、登場人物の主観に属する、現前的なイマという意味であるが、これらは神話や伝説の内容の次元に属する時間意識であると言える。他方、残る24例は、神・事物・地名・風習などの縁起を語り、それがイマにどう及んでいるかを説明するもので、すべて地の文中にあらわれる。そのイマは古事記述作の時点を指示しており、そこに述作者に属する時間の世界があらわれていると言える。このような述作者の時間をよく示すものとして、もう1つ「スデニ」の語を挙げることができる。全41例のスデニには、その語を含む文が各章段（ひとまとまりの筋の小単位）の尾部に立つことはない、という共通した性格がある。つまり「スデニ」を含む文は、未だ内容として完結することがなく、話は必ず先へと続くことになっている。述作者は事件の終末までを見通す位置にあり、結末へ結末へと読者（と仮りに呼んでおく）をいざなう道程において、この「スデニ」という語をクサビのように打ちこんでいっているものと理解できる。以上のような時間の二重性の中に、叙事的文芸として古事記を吟味する際の、いとぐちの1つが見出せるのではあるまいか。

さて、神話の中では、過去はなお十分に過去としての時間的独立を得ていないと思われる場合が多い。その時間的輪郭の不透明さは、1つには事件の

回復可能性・反復性によって、また１つには空間観念との未分離によってもたらされている。たとえば別天神たちは「身を隠し」ても高天原という空間に永住する。岐美二神の最初の結婚の失敗は「亦還り降りて改め言」うことで元の時点に回帰した。石屋戸に隠れた天照大御神は神々の呪術によって復活する。そこには「とりかえしがつかない」という過去の特質は欠けている。

とはいえ、事件の１回性・非回復性・不可逆性という観点が、記紀の神話に全く見られないわけではない。幽明境を別った岐美二神の復縁は結局成らず、邇邇芸能命は石長比売を返したが故に永遠の生命を喪失した。さらに、須佐之男――大穴牟遅――事代主と系譜の続く根の堅州国の神話には、いわば「世代交替劇」の視点の存在が指摘できそうである。

このような「とりかえしのつかなさ」への関心は、多遅摩毛理・倭建命・赤猪子などの説話においては、あきらかに情緒・感動をともなって表出される。無限と有限との時間の齟齬が、説話の悲劇的美の契機となっていると言えよう。

次に、神話を別として、ここに日本書紀の時間意識を吟味してみると、そこには、過去に現在の物事の原点や規範を求める思想や、すでに多くの年を経たという感慨や、未来永久にわたって何々という祈願や誓約などが見られるのであるが、全例60例中の52例まで（87％）は、詔勅・上奏文・外交文書などに含まれているものである。この現象が意味するところは、おそらく、

１．詔勅、外交文書等は、内容・発想・修辞ともにほとんど中国のそれの模倣であるから、規範としての過去・理想としての未来の観念がそれらの中にだけ見られるとすれば、そのような観念そのものもまた外来のものと見なされ得ること。

２．そのような過去・未来に言及することは、おおむね政治的な行為であり、そのような過去・未来の観念は支配層に属するものであったこと。

などであろう。

こうした公的言文の流れと並んで、一方には伝承歌謡の流れがあり、さら

に一方にはノリトやシノヒゴトの流れがあって、それらが「万葉」前夜の文学的状況を形成していたわけである。

記紀歌謡と万葉歌とを巨視的に比較するとき、両者を区別する最も見やすい事実の１つとして、前者には「いにしへ」に対する抒情が見られず、もっぱら後者においてそれが顕著である、ということがある。

柿本人麻呂は、喪失の時への悲痛な想いを歌っている。人麻呂には、個人を超えた、宇宙大の、根源的な時間が「原点」として存在していたと思われる。それは万物が回帰すべき神話的な時間であった。その原点から不条理にも隔絶され、いわば歴史の中へ、一回的な事件の継起の中へと投げ出されていった人間の悲劇を、彼は見つめていたのであった。

去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる（２—211）

の１首は、その上３句が、円をなして循環する神話的時間に対応し、下２句が、直線的に流れる歴史的時間に対応するという意味で、人麻呂の世界を端的に物語るものである。

大伴旅人もまた、喪失の時への切実な想いをその抒情の根底に横たえているが、しかし、根源的な存在との接触を失うまいという願望や、救済としての神話的時間から見離された者の慟哭やは、もはや旅人にはかかわりのない世界であったと考えられる。彼の歌に見られる「過去」は、そのほとんどが自己の体験の射程範囲に限られている。彼の「過去」の特徴は、それが「わが盛り」の日々への追憶と離れがたく結びついていることである。また、旅人には、相反する２つの未来観が存在した。１つは「万代」永久の思想であるが、それは儀礼歌や社交歌の類にかぎって示されており、そこに旅人が主体的な重みをかけていたとは考えられない。もう１つの未来観は、「生ける者つひにも死ぬる者にあれば」という諦念ないしは覚悟であって、それが他界観念を伴っていないところに特徴がある。彼が、その過去に対すると同様に個人的射程の中で直面していた未来は、老齢という生理的条件からも、妻の死という人生的条件からも、また大伴氏の衰運という政治的条件からも、す

べて逼塞する未来であった。彼が私人として現在に安んじるためには、あるいは「変若つ」ことを夢み、あるいは酒に耽溺し、あるいは仙境の仮構に遊ぶことが必要であったのだ。彼の文学の本領は、時間との勝ち目のない争いによってはぐくまれたものと言えるのである。

大伴家持の時間意識についても言うべきことは多々あるが、今は詳述の余裕がない。その亡妾悲傷歌

妹が見し屋前に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに（3—469）

の1首を瞥見してこの項を終らざるを得ないのであるが、憶良の日本挽歌の1首（5—798）を換骨奪胎して作られたと思われるこの歌には、しかし「時は経ぬ」という、憶良歌にはない表現があり、しかもそこにこそ家持の抒情の核が存在すると考えられるふしがある。「時」は本来その述語動詞として「過ぐ」をとるのが慣例であり、また動詞「経」は本来その主語として「年」「月」「世」などの長い経過を意味する語を上にいただくのが慣例であった。すなわち家持の時代に至ってはじめて、「時」は「月・日」や「世」に相当する長い経過を内容とするように変質し同時に抒情の対象としての資格を確立したと考えてよさそうである（ただしこの点についてはなお後考を要するものがある）。

最後にもう1つ、角度を変えて「永遠」の問題をとりあげてみたい。

万葉集には、吉野に関する歌が95首散在するが、その半数に近い42首が何らかの形で時間の観念を表出しており、さらに、そのうちの約20首は「永遠」の時間に触れている。いったいなぜ、またどのようにして「吉野」と「永遠」とは結びつくことになったのか。

文献にあらわれる吉野のうち、最も古い時代に比定して語られているのは、記紀の神武東征伝に記される吉野である。地理的に見ると、熊野からの山越えでまず吉野川の河尻に出たという古事記の記述には無理があり、もしこれを何らかの事実の反映として考えるならば宣長の言うように「是は後に別に

幸行る時の事なりしが、混ひつる伝ならむかし」といった事情を想定すべきかもしれない。それはともかく、吉野の地で天皇が出会う三人の人物、鵜飼の祖である贄持の子、吉野首らの祖である井氷鹿、国巣の祖である石押分の子の現われ方を見るに、そこには反抗者あるいは敵対者としての姿をほとんど読みとることができない。この点から導き出されるのは、2つの相反する仮定である。1つは、この地域が最初から天皇に対して無抵抗であったか、またはきわめて早い時期に帰順したものであったという仮定であり、もう1つは、逆にこの地域が最も皇化の遅れた異蛮の地であったが故に、記紀的秩序への編入に際してはかえってその帰順の姿勢が強調されたのだという仮定である。

神武即位前紀（戊午9月5日以下）によれば、天皇は夢の教えに従って椎根津彦および弟猾を天香山に派遣して、祭祀のための土を取ってこさせる。続く記事の一部を引用しよう。

> 乃ち此の埴を以て、八十平瓮・天手抉八十枚・厳瓮を造作りて、丹生の川上に陟りて、用て天神地祇を祭りたまふ。(中略) 又祈ひて曰はく、「吾今当に厳瓮を以て、丹生之川に沈めむ（中略)」とのたまひて、乃ち瓮を川に沈む。(中略) 天皇大きに喜びたまひて、乃ち丹生の川上の五百箇の真坂樹を抜取にして、諸神を祭ひたまふ。

ここに言う丹生の川上を、吉野川の上流と考えるならば、この地域は呪術上の聖地として存在していたことになる。十月一日の記事にあるように、天皇は厳瓮に供した供御を食することによって、以後神の加護を受け、戦に勝つ。吉野は宇陀平定の呪術的根拠地としての性格を持っていたわけである。そしてこのことは、先に挙げた相反する2つの仮定の前者を幾分か支持するように思われる。ただし、松田寿男氏は『丹生の研究』において、書紀の言う丹生川上を宇陀郡菟田野町の入谷に比定され、それが天武朝において吉野族の顕彰のために吉野の地へと移されたのだと主張されている。氏の論は、古代における宇陀地方の水銀の生産に着目した、すぐれて示唆的なものであるが、その言われる壬申の乱の天武天皇と吉野族の経済力との関係になお検討の余

地があり、私としてはなお直ちには従いがたいものを感じている。吉野川上流地域は山岳信仰とも関連して、宗教の面から説明されるべきものではなかろうか。

吉野の地に文献上はじめて「永遠」の観念が導入されるのは、記紀の叙述の順序に従えば、雄略天皇の時代である。

天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の浜に童女有りき。(中略) 爾にその嬢子の好く儛へるに因りて、御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、

呉床座の　神の御手もち　弾く琴に　舞する女　常世にもがも

といひき。

この歌を、伝承的な神事歌と見るか、それとも中国的仙境観に基づく創作歌と見るかは議論の分れるところである。私はこの歌自体の中に後者の理解の根拠となるべき積極的理由を見出すことは必ずしもできないと考えるので、これは独立した神事歌と解すべきかと思うのであるが、それにしてもこの境地と、「高唐賦」など中国的神仙譚との径庭はもはや極めてわずかである。やがて、吉野を仙境として修辞をつくす、懐風藻のいくつもの詩があらわれてくることは周知の通りである。

ところで、古人大兄も大海人皇子も、吉野に隠退した表向きの理由は、仏門に入るためであった。そのことと今の私の主題である時間意識の問題とを直接に結びつける材料は何もない。ただし、もし彼らの入ったのが比蘇寺（吉野寺）であったとすれば、私たちの想像力が若干刺激されることは事実である。吉野寺について、欽明紀14年5月の条に次のような記事があるからである。

夏五月の戊辰の朔に河内国信さく、「泉郡の茅渟海の中に、梵音（のりのおと）す。震響雷の声の若し。光彩（うるに）しく晃り曜くこと日の色の如し。天皇心に異しびたまひて、溝辺直を遣して、海に入りて求訪めしむ。是の時に、溝辺直、海に入りて、果して樟木の、海に浮びて玲瓏（てりかがや）くを見つ。遂に取りて天皇に献る。

画工に命して、仏像二軀を造らしめたまふ。今の吉野の寺に、光を放ちます樟の像なり。

ここには、新羅国の王子天の日矛の玄孫であって太陽神の後裔である田道間守の伝説と文脈を共にするものがある。比蘇寺、帰化人、日神信仰、日の御子、嶋宮、と並べて行くとき、吉野をめぐってそこにひとすじの見えない糸を想像するのは余りに放恣に過ぎようか。

〔付記〕本稿は国際研究集会の性格上、研究現状の展望を主眼とした。ために、内容上もまた表現上も筆者の既発表の諸論文と重複する部分が少くない。記して各位の了解を乞う次第である。

研究史のための参考文献年次配列

☆ ……翻訳論文
☆☆……翻訳単行本
★ ……論文
★★……単行本
○ ……雑誌特集

1963（昭和38）
☆☆Mircea Eliade・ 堀一郎訳 永遠回帰の神話 未来社
1967（昭和42）
☆☆Edmund Husser・立松弘孝訳 内的時間意識の現象学 みすず書房
★★西郷信綱 古事記の世界（p.184、194） 岩波新書
1968（昭和43）
★★益田勝実 火山列島の思想 筑摩書房
1969（昭和44）
☆Edmund R. Leach・青木保訳 時間の象徴的表象に関する二つのエッセイ

（平凡社　現代人の思想15　山口昌男編『未開と文明』所収）
★平野仁啓　日本人の時間意識の展開〈文芸研究〉21号
☆☆Georges Poulet・井上究一郎他訳　人間的時間の研究　筑摩書房
☆☆Gaston Bachelard・掛下栄一郎訳　瞬間と持続　紀伊国屋書店
1970（昭和45）
★粂川光樹　古事記の「今」〈古典と現代〉33号（有精堂「日本文学研究資料叢書」記紀Ⅱ　に再録）
★曽倉岑　「この川の絶ゆることなく」考　《論集上代文学》第1冊
1971（昭和46）
☆☆John Cohen・小野、佐竹訳　時間の心理　協同出版
★粂川光樹　古事記の「スデニ」〈短大論叢〉42集（関東学院女子短大）
★粂川光樹　万葉集の「今」《論集上代文学》第2冊
★伊藤博　万葉集における「古」と「今」　―巻9の構造論を通して―
〈国語と国文学〉12月号
1972（昭和47）
☆☆Eugène Minkowski・中江、清水訳　生きられる時間Ⅰ、Ⅱ　みすず書房
★粂川光樹　（万葉集の）時間　〈国文学〉5月号
★★柳生章　翻訳語の論理　―言語にみる日本文化の構造―　法政大学出版局
★粂川光樹　古事記と時間　試論1　〈古典と現代〉37号
★丸山真男　歴史意識の「古層」（筑摩　日本の思想6　歴史思想集所収）
★平野仁啓　柿本人麻呂の時間意識〈文芸研究〉28号
1973（昭和48）
★平野仁啓　古代日本人の時間意識の成立　〈明治大学人文科研紀要〉
★粂川光樹　古事記と時間　試論2　〈古典と現代〉38号
○雑誌〈ユリイカ〉8月号　総合特集　文学の時間　青土社
★粂川光樹　試論・人麻呂の時間　《論集上代文学》第4冊
1974（昭和49）
★三谷邦明　古代叙事文芸の時間と表現（上）（下）―源氏物語に於ける時間意識の構造―　〈文学〉1月号、2月号
★三浦佑之　時間意識の悲劇性　―石比売伝承について―　〈成城国文〉1号
★粂川光樹　古事記と時間　試論3　〈古典と現代〉40号
★大室幹雄　古代中国における歴史と時間　〈思想〉8月号
☆☆Hans Meyerhoff・志賀、行吉訳　現代文学と時間　研究社
1975（昭和50）
○雑誌〈エピステーメー〉12月号　特集　時間　朝日出版社

★★田中元　古代日本人の時間意識　吉川弘文館
○《Foreign Litarature》③　小説の時間　朝日出版社
1976（昭和51）
★粂川光樹　試論・旅人の時間　《論集上代文学》第6冊
★神野志隆光　古代時間表現の1問題　―古事記覚習―《論集上代文学》第6冊
★★平野仁啓　続・古代人の精神構造　未来社
★★中埜肇　時間と人間　講談社　現代新書
★★三宅剛一　時間論　岩波書店
★森朝男　柿本人麿の時間と祭式（鑑賞日本古典文学　第3巻『万葉集』　角川書店）
★永藤靖　時間の様相（上）〈文芸研究〉36
○雑誌〈言語〉特集　ことばの時間論
1977（昭和52）
○雑誌〈理想〉特集　時間論の地平　理想社
★粂川光樹　「時は経ぬ」考　―試論・家持の時間―　《論集上代文学》第7冊
★大久間喜一郎　「去にし」の抒情（森脇博士古稀記念　『万葉の発想』所収）桜楓社
★永藤靖　時間の様相（下）〈文芸研究〉37
★奈良橋善司　「いにしへ」の見える場所（『万葉の虚構』所収）　雄山閣
★神野志隆光　古代文学において〈時間〉はいかに意識されたか　〈国文学〉9月号
★田中文雄　人麿の懐古意識をめぐって　―近江荒都歌を中心として―（『熊谷武至教授古稀記念　国語国文学論集』所収）　笠間書院
★粂川光樹　懐古的抒情の展開　《論集上代文学》第8冊
★近藤章　古の人にわれあれや　《論集上代文学》第8冊
1978（昭和53）
★粂川光樹　万葉集の「時」　〈フェリス女学院大学紀要〉13号
★永藤靖　古代日本文学と時間意識（承前）―時間と時間を超えるもの―　〈文芸研究〉39

討議要旨

秋間俊夫氏（オークランド大学講師）より、時間意識の問題を細分化して研究していくことに対しての若干の危具がコメントされ、つづいて、吉野の

永遠の意識と古代国家の成立期ということがいかに関わっているか、またそれは「古事記」にあらわれている時間意識の変遷とパラレルな関係をもつのではないか、という質問があった。これに対し発表者より、大海人皇子が吉野にのがれ、その後天武朝になり、壬申の乱の功績者達が力を得てくるという背景の中で大海皇子の支えになった吉野地方の豪族もまた力を得て神話的な効果を与える役目をし、吉野が神話的な永遠観に結びつけられていったのではないかと、松田久雄著「丹生の研究」等を援用しながら返答があった。

大久保正氏（国文学研究資料館教授）より、常世意識と時間意識の関係をいかに考えるかとの質問があり、発表者より、複雑な問題であるが、やはり常世観念の変化を丹念にたどり、トコという言葉の面からの調査と、常世の実体的な内容からの把握を組み合わせていけば答えの筋道が見えてくるであろうとの返答があった。